

早稲田大学
図書館所蔵

蔵書印譜私稿（八）

大江 令子

凡 例

- 一、本稿は本館所蔵資料に見られる蔵書印を紹介するものである。
- 一、排列は人名（印の使用者名）の五十音順とする。
- 一、印影は原則として原寸大とする。印色は各々の原色を再現するのは困難なため、朱・墨等、近似の色をもつて示した。但し、印が資料の文字や罫にかかっている場合はそのまま墨刷りで示し、印の色を注記した。
- 一、必要と思われるものには印文の読みを記した。
- 一、印の使用者の経歴等、簡略な解題を付した。参考文献は一々あげないが、既刊の事典・印譜・評伝等を参照した。
- 一、解題末尾に、印を採集した資料名を添えた。

目次

巖谷 一六	清川 玄道(五世)	徳川 頼倫
大槻 玄俊	佐藤 硯湖	中村武羅夫
大槻 俊斎	里村 昌純	夏目 成美
小野 蘭山	佐野 常民	古田 弘計
教 覚	品川 忠道	星野 恒

〔訂正〕 本稿第七回(本誌第四五号)所収の印について、左記の誤りがありました。訂正してお詫び致します。

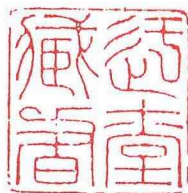
①上田秋成の項 小野則秋著『日本の蔵書印』に上田秋成の印として「昨非庵蔵書記」なる印文があげられているのに従って、掲出印を秋成の印としましたが、秋成が「昨非庵」の号を使用した例が確認されておらず、この号自体秋成のものでない可能性が大きい。ため、この印については確証が得られるまで秋成の印としないことと致します。

②小幡太室の項 掲出の「小幡文庫」印を太室印としたのは誤りでした。

③神原甚造の項 「神原家図書記」印を朱印としましたが正しくは墨印です。

なおこれらについて、青裳堂書店店主後藤憲二氏、九州大学教授中野三敏氏、実践女子大学教授渡辺守邦氏の三方よりご指摘、ご教示をいただきました。記して深謝申し上げます。

(おおえ よしこ 図書課特別資料室)

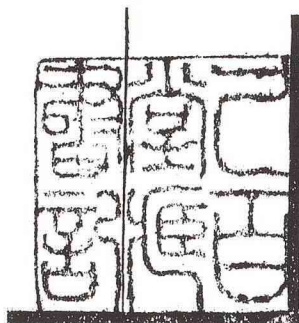


巖谷 一六（一八四一—一九〇五）

書家。天保五年近江水口に生れる。名は修、字は誠卿、号は一六居士・迂堂・金粟道人・吞沢山人・古梅等。医を三角東園、漢学を皆川西園に学び、二一歳で父の職を継いで水口藩医となった。明治元年書記官として新政府に入り詔勅・制令の類の浄書を執筆、のち内閣書記官、元老院議官、錦鶏間祇候、貴族院議員を歴任した。書ははじめ中沢雪城に学び唐様の書をよくしたが、明治一三年、清朝の書家楊守敬が来日するとその門に入って六朝の書を学び、以後雄渾洒脱の書風をもって一流をなし、明治書壇の雄として日下部鳴鶴とならび称された。法帖『白樂天上篇』、『熾仁親王墓誌銘』等が知られる。明治三八年没。

『隸釈』乾隆四三年跋刊

(朱印)



「己百
堂蔵
書記」

大槻 玄俊 (一八四一—一九〇八)

蘭方医。天保一二年大槻俊斎の長男として江戸に生れる。名は肇、明治の初年および二〇年以降俊斎を名乗った。生涯に三度長崎に遊学し、松本良順、ポンペ、ボードウィン、ハラタマ等に医学・化学を学んだ。父を助けて種痘所に働き、万延元年父とともに種痘所建設の功を幕府より賞せられた。維新後東京本石町に開業、私塾を開き洋学を講じるかたわら、薬局「己百堂薬舗」を開業した。のち陸軍軍医となり日清・日露の両役に従軍、退官後は大磯に開業した。明治四一年没。

『東韓事略・琉球事略』(甘雨亭叢書)

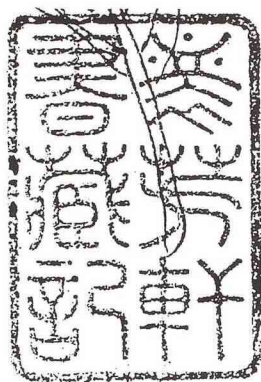


大槻 俊斎（一八〇四—一八六二）

蘭方医。文化元年陸前国桃生郡赤井村に生れる。名は肇、字は仲敬、弘淵と号した。文政四年江戸に出て医学を学び、天保八年には長崎に赴きシーボルトに蘭学を学んだ。同一一年江戸下谷に開業。嘉永二年伊東玄朴らと牛痘接種に成功、安政元年セリウスの外科書等を摘録して『銃創瑣言』を著しその名を高めた。同三年仙台藩医となる。安政五年玄朴ら江戸在住の蘭医と諮り神田お玉ヶ池に種痘所を創立、万延元年種痘所が幕府の直轄となるに従い種痘所頭取ならびに幕府御番医に任ぜられた。翌年種痘所を西洋医学所と改称後も頭取をつとめた。文久二年没。

『東韓事略・琉球事略』（甘雨亭叢書）

(朱印)



「衆芳軒
書藏記」

小野 蘭山 (一七九—一八二〇)

本草学者。享保一四年京都に生れる。名は職博、字は以文、通称喜内、朽匏子と号した。松岡恕庵に本草学を学び、二五歳で学塾衆芳軒を開講、多くの門弟を集めた。寛政一一年七一歳で江戸に招かれ、躋寿館に本草を講じるかたわら、幕命により甲州・信州・駿州・伊勢・紀伊の諸国を巡って薬草を採集し、その成果をまとめ上進した。享和三年多年にわたる本草研究の集大成として『本草綱目啓蒙』四八巻を刊行。蘭山の講義を孫の小野職孝と門人岡村春益が整理し、蘭山自身の手訂をへて上梓された本書は、江戸時代最大の博物誌といふべきもので、幕末に至るまで版をかさねた。文化七年没。

『長崎諸物産実録秘中』写本



「梅之房」

教 覺

連歌師。江戸亀戸天満宮の社僧。号・住居ともに梅之坊と称した。嘉永六年より安政七年まで徳川幕府の御連歌始の執筆をつとめた。編著書に『都玖波雑談』『連歌年立』『有米廼記』等がある。

『新撰筑波集』写本



清川 玄道(五世) (一八六一—一八六六)

漢方医。天保九年江戸に生れる。家は代々医を業とし、玄道を襲称した。五世玄道名は孫、字は念祖、菖軒と号した。はやくに伊沢榛軒に漢学と医学を学び、榛軒没後は弟柏軒に師事し、一六歳で代診生となった。文久二年日本橋に開業。明治維新後西洋医学の盛行にあつても漢方医学を主張し、明治九年古川精一が柳橋に開設した行矣館の副院長となった。ついで博済病院を創立し、一二年医学研究温社が設立されると副都講に選ばれた。明治一九年没。

『医門法律』寛文五年刊



佐藤 硯湖 (一八三一—一八九〇)

篆刻家。天保二年越前国福井に生れる。名は誠、字は思誠、通称実吉、尚古齋・彫蟲居等と号した。篆刻を羽倉可亭に学ぶ。福井藩に祐筆として仕えたが、文久三年出府、維新後は行政官書記、太政官主記、大主記、宮内省文学御用係を歴任した。明治三三年没。

『印法抄書並尚古齋遺書』佐藤硯湖自筆

『清脩妙論帖』写本他



里村 昌純 (一六四九—一七三)

連歌師。慶安二年生れ。昌程の子。昌陸の弟。初名昌勃、寛文八年に昌純と改名、安々庵、蝦齋と号した。法橋。延宝三年幕府連歌始の第三を勤仕、のち江戸に移り、享保四年まで勤仕した。連歌の衰退を嘆きその再興に力を尽くした。著書に『拾螢抄』『老の周諄(くりごと)』

『里村家連集』等がある。享保七年没。

『六家集追拔萃』里村昌純写

佐野常民
圖書之記

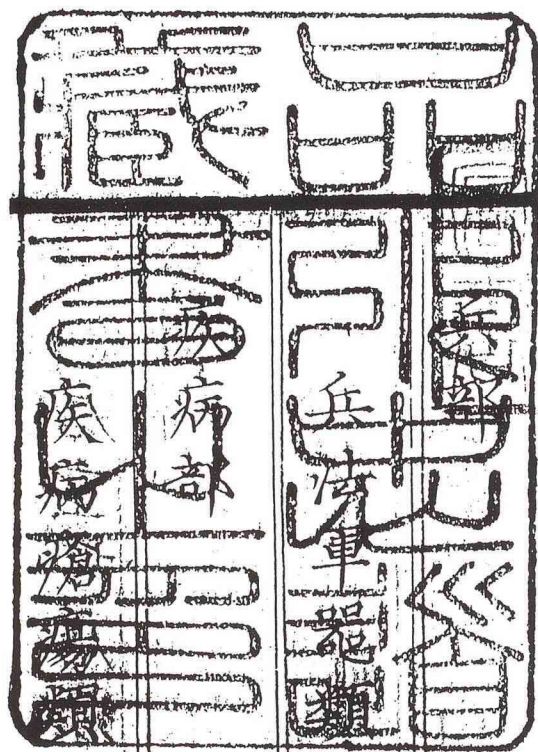
(朱印)

佐野 常民 (一八三一—一九〇二)

政治家。日本赤十字社の創立者。文政五年肥前佐賀に佐賀藩士下村充賛の五男として生れ、藩医佐野常徴の養子となった。藩校弘道館に学び、広瀬元恭、緒方洪庵、伊東玄朴らに医学・洋学を学んだ。藩の精練方(理化学研究所)主任となり、蒸気機関車や電信機などを試作、海軍取調方付役として蒸気船製造にあたった。維新後は中央政府に招かれ、明治六年兵部少丞となって海軍創設に尽力、以後、元老院議員、大蔵卿、元老院議長、枢密顧問官、農商務大臣等を歴任した。一方、西南戦争を機に博愛社(のち日本赤十字社)を創設した他、博覧会総裁として勸業事業を推進し、龍池会(のち日本美術協会)を興して美術工芸の発達にも多大な貢献をなした。明治三五年没。

『航西日記』明治四年刊

(朱印)



「品川忠道
蔵書之印」

品川 忠道

(一八四〇—一八九二)

外交官。初代清国総領事。

天保一一年長崎に生れる。明治二年通商少佐に任ぜられ上海に派遣される。同四年伊達宗城、柳原前光らに従って日清修好条規締結にあたる。翌年帝国領事館が創設されると、鎮江、漢口、九江等を兼轄して初代領事に任ぜられ、ついで総領事となった。以後一七年来まで清国にあつて日清の貿易進展に尽くした。明治二四年没。

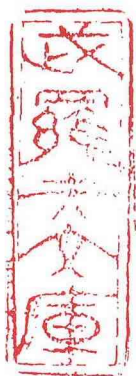
『南山俗語考』文化一〇年刊



徳川 頼倫 (一八七一—一九三五)

侯爵。旧南葵文庫庫主。明治五年、田安家徳川慶頼の第五子に生れる。家達の弟。幼名藤之介。一三年旧和歌山藩主徳川茂承の養子となり、三九年家督を相続した。英国ケンブリッジ大学留学中に欧米の図書館を視察、三五年麻布飯倉の邸内に私設図書館南葵文庫を開設し、四年より一般に公開した。宗秩寮総裁として皇族関係の諸務にあたる一方、日本弘道会・稀書複製会等多くの事業に関与、なかでも図書館事業については、大正一四年に亡くなるまで一二年にわたって日本図書館協会総裁をつとめ、関東大震災によって全焼した東京帝国大学附属図書館へ南葵文庫の蔵書九万六千冊余を寄贈する等支援を惜しまなかった。掲出印は南葵文庫創設当時その蔵書に捺されたもの。

『名所方角抄』写本



中村武羅夫 (一八六—一九四九)

編集者、小説家、評論家。明治一九年北海道空知郡岩見沢村に生れる。明治四〇年上京し小栗風葉に入門、雑誌「新潮」の編集に加わる。翌四一年七月号を国木田独歩追悼号として独力で編集し「新潮」の文壇の地位を確立、大正期の名編集者として知られた。文芸誌「不同調」や「近代生活」を創刊、川端康成らと結社十三人倶楽部を作り、評論集『誰だ？花園を荒す者は！』を著す等、新興芸術派運動の中心となつてマルキシズム文芸を攻撃したが、自身は通俗小説で人気を得、大正末から昭和一〇年代にかけ大衆文壇の大御所的存在であつた。昭和二十四年没。

『小説の構成』(文学論パンフレット8)昭和七年刊

(朱印)



「夏氏
家藏」

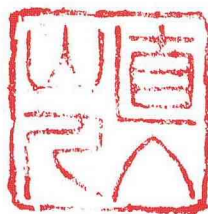
夏目 成美 (七四九—一八二六)

俳人。寛延二年江戸藏前の札差井筒屋の五代目に生れる。一六歳で家督を継ぐ。名は包嘉、幼名泉太郎、通称井筒屋八郎右衛門、隠居後は儀右衛門を名乗る。初号八良治、別号修行庵、随斎、不随斎、法林庵等多数。一五歳で『猪武者』に入集、翌年俳号を成美に改めた。晁台、蓼太らの芭蕉翁追悼の企てに協力するなど蕉風復興に寄与、几董、白雄、旧国、巢兆、乙二ら多くの俳人と親交をもったが、みずから「俳諧独行の旅人」といい、一定の流派には属さなかった。また一茶に対しては終始庇護者の立場にあった。編著書に『浅草はうご』『二夜流行』『随斎諧話』『七部集纂攷』『成美家集』、序跋の類をまとめた文集『四山藁』がある。文化一三年没。

『宗長手記』夏目成美写



古田 弘計



「直入
山人」



「温故堂」



「古田
之印」
(墨印)



「広計」



豊後岡藩の家老。国学者。江戸時代後期、文政頃の人。字は弘卿。淵黙、温古堂、不染斎等と号した。山鹿流の兵学をよくし、典故に詳しく歌文にも長じた。村田春海、加藤千蔭らに学び、肥後の長瀬真幸とも歌道の交わりを結んだ。岡藩の藩校由学館の副学正に挙げられ、家伝の織部流の茶技にも通じた。著書に『岡藩家老次第考』『不染斎歌集』がある。

『清輔袋草紙』貞享二年刊



星野 恒 (一八六一—一九二七)

歴史家、漢学者。天保七年越後国蒲原郡に生れる。名は世恒、字は徳夫、通称恒太郎（のち恒）、号豊城。二歳で江戸に出て、塩谷宕陰に漢学を学んだ。維新後郷里水原の弘業館に教鞭をとったが、明治八年再び上京して太政官修史局に入り、『大日本編年史』の編纂にあたった。二一年より帝国大学文科大学教授となり、国史学・漢学を講じ、のち文科大学内に設置された史料編纂掛（現史料編纂所）の部長として『大日本史料』『大日本古文書』の刊行を開始した。著書に『国史纂要』『古文書類纂』『史学叢説』『豊城存稿』等がある。大正六年没。

この印のある『物類品隲』には本館初代館長の市島謙吉（春城）の蔵書印「嶋謙吉図書印」がある。市島は星野と同じ蒲原郡の生れ。弘業館で星野の教えを受け、後年まで親交があった。

『物類品隲』宝暦一三年刊

